

## 第9回特定外来生物等分類群専門家グループ会合(爬虫類・両生類)

### 議事概要

1. 日時 2022年9月22日(木) 10:30~12:00
2. 場所 オンライン会議
3. 出席者(敬称略) (委員) 長谷川雅美(座長)、戸田光彦、安川雄一郎  
(環境省) 自然環境局野生生物課外来生物対策室長 大林圭司、  
室長補佐(統括) 水崎進介、室長補佐 高瀬裕貴、野生生物専門官  
武藤静、移入生物対策係長 成田智史、外来生物対策係長 堀江彩生  
(農林水産省) 大臣官房みどりの食料システム戦略グループ 課長補  
佐 古林五月、係員 湊谷陽太

#### 4. 議事概要

##### 【今回指定の考え方について】

(環境省から資料1を説明)

- ・(戸田委員) 特定外来生物に係る規制の一部を適用除外にできるという法改正によって、これまで長年議論されてきたアカミミガメが特定外来生物として扱えるようになったのは大きな進歩だと思う。今後は、アカミミガメ、アメリカザリガニのほかにも適用除外で指定すべき生物がいるのかなど、この法律をより柔軟に運用していけるように検討していく必要がある。
- ・(長谷川座長) 輸入をしっかりと止めるのが外来種対策のスタートでもあり、これが出来たことは大きな進歩である。この法律をどのように運用して日本の自然を良くしていくのかについて、専門家としても取り組みを考えていきたい。資料1の内容について委員は了解した。

##### 【特定外来生物(爬虫類・両生類)の選定について】

(環境省から資料2、3、3の別紙、4を説明)

<生息および被害の実態について>

- ・(戸田委員) 野外で930万個体が生息しており、160万個体が飼育されているという推定があるが、以前よりも輸入が減っているなど状況も変わっているため、今一度新しい情報を収集した方がよい。  
(環境省) 今回の適用除外の「当面の間」という期間にも関係するため、飼育数には注目していく必要があると考えており、今後も引き続き調査していきたい。
- ・(戸田委員) 農林水産業への被害について、レンコン、稲、漁業などの影響が示されているが、この辺りの産業被害について過小評価されているのではないかと。体系的に情報を収集し、被害のあるところ、被害のおそれのあるところを集中的に防除していくことが今後

重要だろう。

(農林水産省) アカミミガメの農林水産業にかかる被害については統計的には不明で、引き続き情報収集していく。

- ・(安川委員) 琵琶湖のはえ縄漁にアカミミガメの被害が出ているとのことで、淡水漁業への影響は盲点だった。被害という点で重要であり、聞き取り調査を考える必要もあるだろう。

#### <規制の範囲>

- ・(安川委員) アカミミガメ属はニシキガメ属やクーターガメ属(クーターガメ類とアカハラガメ類を含む)と交雑する可能性がある。ニシキガメ属との交雑事例は少ないが、クーターガメ属との交雑は散見され、これが流通することもある。また、アカミミガメの色彩変異個体が高値で取引されており、クーターガメ属との交雑で色彩変異個体を作ることが将来的にあり得る。外見がアカミミガメに似た個体があるため、種類名証明書添付生物に「アカミミガメ属の全種」だけではなく、「アカミミガメとの交雑によって生じた生物」も加えることが妥当だと思う。
- ・(安川委員) アカミミガメ属は非常に特徴的な形態をしており、アカミミガメによく似た生物としては同属種がほとんどである。しかし、アカミミガメとクーターガメ属、アカミミガメとニシキガメ属の雑種は同属種と同じぐらい形態的に似ている。
- ・(安川委員) アカミミガメとアカミミガメ属の他種、あるいはアカミミガメ属とその他の属の見分けは、ある程度の知識があればそれほど難しくない。ただ、ほとんどがいい加減なインボイスネームで輸入され、混乱していることが多い。  
(安川委員、戸田委員) クーターガメ属とニシキガメ属はペットとして多く輸入されているものであり、アカミミガメとの交雑種を種類名証明書添付生物とすることは差し支えないが、これら全種を種類名証明書添付生物にすると手続きが煩雑になるおそれがあるため、そこまではしない方がよい。
- ・(安川委員) クーターガメ属とニシキガメ属の輸入はミシシippアカミミガメに次いで多いと考えられ、アカミミガメの輸入規制後にこれらが代替種となる可能性がある。
- ・(戸田委員) アカミミガメの代替利用についての議論は重要と思う。ただ、クーターガメ属とニシキガメ属に比べてアカミミガメははるかに頑健な種であり、これらがそのまま代替利用されるわけではないのではないかと。
- ・(安川委員) クーターガメ属とニシキガメ属は幼体の時は弱く、飼育はやや難しい。ただし、フロリダアカハラガメ(クーターガメ属)は、ミシシippアカミミガメに次いで寒さに強く頑健といわれている。アカミミガメがいるところではアカミミガメに負けてしまうが、アカミミガメが入っていない場所では危ないかもしれない。現在は数千~1万円弱で流通しているため手軽に買えるものではないが、大量に増やされて1,000円を切ると問題になるかもしれない。

- ・(戸田委員) 代替種については、すぐに指定というわけではなくとも、カメの飼育文化とともに考えていくべきと思う。

<今後の対応について>

- ・(戸田委員) アカミミガメを指定して終わりではなく、飼育下の個体と野外の個体を今後どうしていくのかを引き続き考えなければならない。
- ・(戸田委員) アカミミガメを野外で採集して飼うということは禁止されないが、いったん捕ってきたら放出はできなくなり、譲るにしても個体が死ぬまで誰かが面倒をみなければならない。短命なザリガニとは異なり非常に重い責任と覚悟が必要である。安易に捕まえてくるのではなく、本当に終生飼育ができるのかをよく考えないといけないということをしつかりと伝えていく必要がある。
- ・(長谷川座長) アカミミガメの特定外来生物指定をモデルケースとして、今後、野外に放出しない流れを整えていく必要がある。  
(環境省) 安易に飼って増えてしまうことは良くないと考えており、長寿命な生物を飼うことはどういうことなのか、今後も周知していく。
- ・(安川委員) 野外のアカミミガメの個体数が多いため、ある程度予算をかけて積極的に取り除く、あるいは駆除を試みる人を国が支援するなど併用して行っていく必要がある。流通を止めるだけではなかなか個体数は減らない。
- ・(戸田委員) 野外での個体数増加を鑑みると一律に防除することは難しく、優先順位や主体をどうするかを考えていく必要がある。
- ・(長谷川委員) 防除の成果を積み重ね、公表して情報共有していくことが重要。アカミミガメ対策を水辺の自然を取り戻すツールとして使っていけるような事業展開が大事。これを具体的に、技術的に可能にするために、防除の優良事例などを共有していただきたい。  
(環境省) 未侵入地やまだ個体数が少ない場所、希少種の生息地などを優先的に対応していく必要があると考えている。アカミミガメ・アメリカザリガニについての防除マニュアルも作成しているので、皆さんに使っていただけるようにしたい。また、アカミミガメについての動画も作成し環境省ホームページで公開しており、学校教育なども含め様々な機会を活かして周知していきたい。
- ・(戸田委員) 本土では、ニホンイシガメとの競合が気になる。ニホンイシガメの生息地でアカミミガメの影響がありそうな場所で防除を実施し、ニホンイシガメの回復を図るといったモデル的なことができるとよい。すでに実施している場所もあるだろうが、これを機にテコ入れをし、うまくいった場合には情報発信することが重要。
- ・(安川委員) 石垣島、西表島ではヤエヤマイシガメと競合関係が生じる。アカミミガメがまだ増えていない沖縄の島嶼での駆除が1つのモデルケースとして有効なのではないか。

以上